

琉球大学学術リポジトリ

鳩間島の口承文芸研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加治工, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40993

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

鳩間島の口承文芸研究

琉球大学大学院
人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 加治工 尚子

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

日本列島の南西端に位置する八重山諸島の中のひとつに鳩間島がある。周囲4キロメートル弱の小さな島である。戦後すぐの絶頂期の人口は654人。日本復帰の頃に33人の最少人数を記録してからは、40人から70人前後で推移し、現在の人口は34世帯48名（2017年9月末）となっている。2009年に島の祭祀の重要な担い手であるサカサ（神司）が不在となった。鳩間島の文化伝承に、消滅の危機ともいえる状況が迫っている。人口の減少や祭祀等における神役の不在は、島の生活に欠くことができなかつた先人の知恵や考え方を受け継ぐ機会を失うことにつながる。こうした危機意識を抱えながらの民話調査は、資料収集に偏向しがちとなり、聴取した資料を活用した研究面が弱いのではないかとの指摘を絶えず受けてきた。

川森博司は「日本昔話の構造と表現の研究」（1998年）において、「昔話をはじめとする口承の説話は、それを語った人々の自分自身（の社会）に対する解釈と考えられる。その意味で、口承の説話は、村落社会の人々の意識を具体的な形で探っていくうえで、絶好の資料といえるのである（55頁）」として、「昔話資料を村落社会の内側からの意識の考察に生かす（93頁）」という研究をされている。この研究を鳩間の伝承資料に対して直接援用することは難しいが、「語った人々の社会に対する解釈」のあらわれであるという見解にそって鳩間島の伝承を捉え直すことはできないだろうか考えた。

本研究では、鳩間島において記録した聴取話の整理を行い、その中から島建てに関する伝承、除災方法の由来を伝える伝承、祭に登場する妖怪の伝承に着目し、行為や伝承に込められた鳩間島の人々の昔ながらの知恵や社会に対する思い、考え方をどのように表現し伝えてきたのかを明らかにすることを目的とする。